

記憶の海

上善如海

序

僕が軽々と原っぱを駆け回ったのは、いつのことだったろうか。こんなにも体が重く感じるようになるずっと前は子供だった。大人になった今となってはものすごく下らないことで怒ったり、泣いたりしていたし、それでも結局は笑い合っていた。全ての物事が、一々感動的で、一々衝撃的で。何もかもが無視できない、そんな空気があった。君たちはどうだろう？

さて今から僕は、君たちがいずれまた誰かにそうするよ
うに、僕が子供だったころの苦い思い出を、どこか奥のほうにしまつて忘れてしまつた思い出を、拾い集めて文章にしてみようと思う。これは時に痛みを感じる作業ではあるけれど、そうすることが、今僕にできる反省や償いであり、また、君たちへの施しでもあると思う。題名は『記憶の海』。海という言葉は、母なるイメージを含んでいる。幼少時代、僕の心は、母と切つても切れない関係にあった。強く、強く結びついていた。

自転車置き場の屋根でもあるから、幅が広い。鬼ごっこで鬼が登ってきて逃げ切れるくらいの広さがある。ここには大人は来れない。ここに来るための唯一の入り口、外階段2階の明かりとりの細長い穴は、僕くらいの子供がちょうど通れるくらいの穴でしかない。そこをくぐつて、今、僕は門の上に一人で膝をかかえている。

空を見上げれば、きらめく星がたくさん見えて、オリオン座や南の第三角形くらいしかわからないけど、いくつかの正座が見える。怒られた時の記憶を反芻しながら、空の星々をながめる。怒られて外に出されることに慣れていた僕は、泣きながらも、3階の自分の家の玄関前から、こんなところへ来て凍えている。

自分が悪いことはわかっている。何度も怒られていることだし、自分自身物凄く恥ずかしいことをしていることぐ
らいの自覚はある。だからこそそれを隠したかったのに、火のついたお母さんにはもう通じない。それが悔しかった。悲しかった。

しかし、寒い。こんな季節に着の身着のまま外に出されてしまつて、風が防げる玄関前からこんなところへ来てしまつて。意識して抑えているのにもかかわらず、それでも震えは止まらない。冷たい風が、頬の涙の跡をなでていく。実はこの門の上からは、マンションの向かいにある、不動

一・ 彼方の記憶 2〜3歳？

ここは僕の家だ。リビングに僕は立っている。窓際で、ソファの斜向かい、ちょうどテレビがあるような部屋の角に僕は立っている。

でもどうしたことだろう。目の前に、お母さんがいる。そして、僕が抱かれている。やさしく、いとおしげに抱かれている。こんなにもやさしいお母さんの顔を、僕は見たことがあつただろうか。こんなにも幸せそうな僕の顔を、知っているだろうか。

安らか…

——安らかでいたいと願う、僕の奥底の、本当のイメージ。

二・ 記憶 小学二・三年生

僕は何でこんなところで膝をかかえているんだろう。とても寒い。溢れ出した涙はもう乾きかけて、ほほの皮をひきつらせている。

ここは僕の住んでいるマンションの門の上。門といっても、

産のコマーシャルに出てきそうなおしやれな一軒家を臨むことができて、窓から漏れている暖色系の明かりがいつも寒さを助長させる。時々人が歩いているのがカーテン越しに見える。さつき一階に降りて行った人はきつと、晩御飯を食べに降りたんだろうな。見るまいとしても、視線は自然にその明かりに吸い寄せられ、体は温かさを望んでしまふ。

「寒い…」

思わず言葉を漏らしてしまうほど、体の芯まで凍えてしまつている。そう言つたとたん、家のリビングが、あたたかい料理が、団欒が、恋しくなつた。頭の中では、ハウスのシチューのCM『おうちへ帰ろう シチューを食べよう』がエンドレスで流れている。

そんな弱い自分を振り払いたくて、強引に首を上に出げた。空の星を見て、自分の小ささを感じる。こんなに空は広いのに、こんなところで僕は凍えて小さくなつて、一人寂しい。小さな存在だ、僕なんて。僕の悩みも、小さな悩みだ。ちっほだけ…。

そろそろお父さんが帰ってくるから、玄関に戻つていようかな。

——少年が初めて自覚した、団欒の渴望。

三．記憶 小学五・六年生

飼育委員の僕。

生まれたばかりのウサギが、ヘビに食べられ、殺された。唯一生き残った一匹のウサギを病院に連れて行き、家に引き取って、必死で看病した。塾から帰ると、ウサギは死んでいた。

——自然、生き物への愛。

四．記憶 中学一・二年生

壊したい、何もかも。

世の中は一見平和だけど、それは地球という多大な犠牲の上に成り立っている。日々砂漠化は世界各国で進んでいるし、絶滅した、或いはその危機に瀕している動物の話もよく耳に入る。自然破壊を卑近な例で言えば、昔住んでいた福岡で、マンションの目の前にあった草の生い茂る空き地が、ある時駐車場にされてしまった。その空き地は、皆でチャンバラをしたり、トノサマバッタを追いかけたり、普段あまり見ることのなかったハラビロカマキリを捕まえ

は格好の標的だろうな。爆弾を仕掛けてスイッチを押すだけでいい。新宿、渋谷。行ったことはあまりないが、人が

沢山いるらしいから楽しみだ。まあ、何人人が死のうが、それはどうだっていい。なんとたつて六十四億人も殺さなきゃならない。とにかく殺して、殺して、殺しまくらなければ、数を数えてたら眠くなること請け合いだ。

全部殺し終わったらひとしきり静かな世界を満喫したいね。誰もいない。誰も。静かな世界。テレビもゲームもないが、そんなことは問題じゃない。毎日毎日勉強しろと口うるさい母親がいない。些細なことで怒りまくる母親もいない。どこまでいってもつまらない勉強なんてしなくていい。成績なんて存在しない。それはなんて平和で、穏やかな世界なんだろう…。

ひとしきり一人の世界を満喫した後は、最後の一人である俺も死ぬ。それで、終わり。実に綺麗だと思わないかい？

——うまく現実と付き合えない僕の安らぎ。

た貴重な場所でもあった。カラスが死に掛けているのを拾ってきて、結局死なせてしまった時もその空き地に埋めた。思い出のたくさん詰まった空き地だっただけに、駐車場にされてしまった時は大人を恨んだものだ。単純に、自然が、地球が好きなのだ。しかし人間はそれを傷つけ、壊してゆく。だから俺は、この世の中がどうしようもない程憎い。いつか、全部壊してやろうと思うくらいに。

それに向けて、計画も立てている。まず歩いて30分足らずの場所にある林の中にひっそりと穴を掘り、そこに住む。食料は近くの商店街で食べ物盗んでくればいい。いや、それは目立つから、そばに畑でも作って自給自足をしようか。たまに肉が食いたくなれば、カラスや野良猫を食べてもいいかもしれない。とにかく、そういった些事は後で考えるとして、隠遁生活が続けながら、体を鍛えに鍛えて、誰にも負けない体を作る。それに関しては、今もう既に実行中だ。大分筋肉もついてきた。でも身一つではさすがに「全て」は壊せないから、武器を造る必要がある。そこら中から集めた鉄屑を溶かして、大きな、分厚い剣を造る予定だ。漫画に出てくるような、ゴツイのをね。体が出来上がって、武器が揃えばいよいよ行動開始。盗んできた爆弾をいたるところで爆発させる。逃げ惑う人々を剣で殺しまくる。朝のラッシュの電車や学校、人でいっぱいデパートなんか

五．記憶の原風景

遠い。今の僕には、どれも遠い記憶。

どれもこれも、今では喜劇。

少年の僕が演じる喜劇。

心の海の底で演じてる。

でも、意識してみれば、今もそれは傍に在る。

僕らは、そんな記憶を辿って、昔へ遡る。

胸を焦がした憎しみ。

自分でもどうしたらいいかわからない衝動。

安らぎへの慟哭。

それらが、僕という海に溶けて、拡散して、馴染んでゆく。

どれもこれも、僕。

その広い海が、僕。

そこにひとつひとつの記憶を全部溶かして、

今の僕という一つの世界を形成していく。

そこは、今とても静まっている。波一つなく、広がる水面。

どこまで言っても、水面、水面、水面…

かあさん？